

(八) 常闇 とこやみ

(おやつ。)

日が翳ってきた。

(雲が出てきたようだ。降ってくればよいが。)

日照りが続いている。毎日毎日太陽がギラギラと照り続けて、田畑はひび割れ、穂も出ないまま立ち枯れる稲が目立ってきた。暦の上では今日から秋になるというのに、今日も朝から風もなく、うだるような暑さである。

額の汗を拭きながら庭に出た佐留は、空を見上げて首を傾げた。今日も青空である。雲はない。だが辺りは徐々に光を失ってきている。全身に緊張が走った。

(日食か。)

手をかざして太陽を見上げた。まだ、まぶしい。衣の袖を引つ張って眼に当たった。

(やはりそうだ。)

布を通して見える太陽は明らかに欠けてきている。やがて辺りは夕方のように薄暗くなってしまった。塀の向こうの騒ぎ声が次第に高まっている。日食があると何か悪いことが起こると言う。

(一体何が。)

不安にかられたのは佐留だけではない。

ここは香具山の麓。高市の宮。宵から急に高市が苦しみ出した。

「どうなさったのでしょうか。」

尋常の苦しみようではない。妻の御名部はおろおろするばかり。

「何か悪いものを召し上がられたのでございましょう。」

「今日は私と同じものを上がられたのです。私は平気ですが、どうして皇子様だけがお苦しみなのか。」

「今年の夏は暑うございましたから、お体が弱っておられたのではないかと存じます。」

「夏の間はとくにおかわりはありませんでしたのに。」

百済人の薬師くすしの見立てにも納得できない。

息子の長屋王も駆けつけた。御名部は思わず涙ぐむ。

「昼間の日食のせいであろうか。」

「馬鹿な。日食で悪いことが起こるなど、迷信です。それより迷信にかこつけて毒を盛られたではありませんか。」

「毒だなんて。そんな恐ろしいことを。」

口では否定しながらも、有り得ない事ではないと思う。

「でも、誰が。」

長屋は口を閉ざして答えない。

高市が亡くなったのは十日後のことである。まだ四十三歳の働き盛りだった。

「日食があると悪いことが起きると言うのは本当なんだなあ。」

「それにしても、あの強い皇子様が腹痛でなくなれるとは。」

「いや、毒を盛られたという噂もあるぞ。」

「初耳だ。誰が毒を盛ったのだ。」

「太后に決まっているではないか。太后は軽王を皇子にして早く位を譲りたいのだが、軽皇子はまだ若い。今、一番実力があるのは高市皇子だ。もし太后に万一のことがあれば、高市皇子に大王位を奪われかねないからな。」

「馬鹿なことを言うものではない。第一、太后様は皇子様のために恩赦までなさったではないか。」

「形だけだ。それに、大赦ではなかった。」

巷の憶測をよそに、高市の宮殿は静まり返っている。

「今さら話したところで、亡くなられた方が戻って来られるわけではありませぬ。」

御名部は、椅子の背に深く身を沈めてかすかに首を振った。御名部自身、夫の突然の苦しみように疑念を抱いている。とにかく、疲れていた。虫が鳴いている。競うように鳴く虫の音に身も心も吸い込まれてしまったなら、どんなにか楽だろうに。

「しかし、皆、父上のご最期を知りたがっております。」

長屋にも、父の死はとも病気とは思えない。何もかも話してはつきりさせたい。このもやもやした思いを全てぶちまけてしまったらどんなにかすつきりするだろうに。菟野と父との間に何があったのかはわからない。軽は十歳で成人したというのに、この春成人した長屋にいまだに官位の沙汰がないのはおかしいではないか。『令』の規定では高官の子は二十一歳で官位を与えられるはずではなかったのか。何かがある。そう思っていた矢先の父の死である。

「知ってどうすると言うのです。今さら最期のご様子を知ったところでどうなるものでもありません。太后の御心に逆らうことなど・・・」

思わず疑惑が口に出る。言葉をとぎらせた御名部は、揺れ動く燭台の炎をじっと見つめ続けた。やがて身を正すと、息子の長屋王を見上げておもむろに口を開いた。

「疑うも良し、信じるも良し、好きにさせるが良いでしょう。何も言わぬのが一番です。」

(そうか。)

長屋は母御名部の言う沈黙のもたらす結果に思い至ると、母のしたたかさに舌を巻いた。

「わかりました。皆にも何も話さぬよう申し付けましょう。」
身を翻すとそのまま部屋を飛び出して行った。

一人残った御名部はまだ燭台を見つめている。御名部の胸の内は複雑である。壬申の乱の後、まるで戦利品かのように吉野方の功労者高市に与えられた。もちろん、御名部は強く逞しいこの従兄が嫌いではない。だが、高市の母は倭国の出である。いかに実力があるうとも、尋常の手段では大王になれない。日継である草壁の妻となった妹阿閉と比べると、自分が見劣りするとは否めない。その上草壁の妻と言えるのは阿閉一人だが、高市には大勢の妻がいた。夫が女の許へ通うたびに、御名部は心穏やかではいられない。阿閉が羨ましかった。草壁が死んで、高市が大王になり、自分が后になる日を何度夢見たことか。そのためには……。妄想は際限なく広がる。

御名部は深い溜め息をついた。自分のおろかな夢が、菟野にはお見通しだったのかもしれない。何と忌まわしい夢を見たことか。罰が当たったのだ。高市の死は自分のせいだ。同じように夫を失ってみると、阿閉の悲しみがよくわかる。

風が出てきたのか、燭台の炎が揺れる。炎の揺らめきは御名部の心の揺らめきでもある。そうだ。何時までも悲しんでばかりはいられない。阿閉の子軽は病弱である。自分には長屋王がいるではないか。父に似て遅く育った息子を、何とかして日の当たる道に出してやりたい。そうだ。吉備を長屋の妻にもらおう。長い間宮中の権力のかけ引きの中に身を置いてきた御名部である。

太政大臣高市の葬儀は先年の草壁の葬儀に負けず劣らず盛大に執り行われた。重臣たちの弔辞の後で歌われた『人麻呂』の歌は、二十五年前の壬申の乱での若い高市の雄姿を彷彿とさせた。

.....
大御身に太刀取り帯ばし

おほみて
大御手に弓取り持たし 御軍士をあどもひたまひ

とこの
斉ふる鼓の音は 雷の声と聞くまで

な
吹き響せる小角の音も 敵見たる虎か吼ゆると

わたらひ
渡会の斎の宮ゆ 神風にい吹き惑はし

あまくも
天雲を日の目も見せず 常闇に覆ひ給ひて

.....

(199)

『人麻呂』の歌が終わった時、人々は、壬申の乱の最大の功労者高市の死と共に、戦後の一時代が終わったことを悟ったのである。皆が『人麻呂』の歌に昔を思い起こしていたとき、一人覚めた目で佐留を見つめる丸顔の男の姿があった。星の落ちる夜のあの精気は今日も影を潜めている。

『人麻呂』の歌は菟野にもまた、深い感銘を与えた。

「草壁の時より良くできている。やはりこれがあの男の本心だ。草壁より高市に心を寄せていたのだ。巷では私が高市を殺したと言っているそうではないか。佐留は心を込めて高市の挽歌を歌うことで私を非難しているのだ。」あれだけ引き立ててやったのに。そう思うと腹立たしい。

「もう佐留の歌など聞きとうはない。」

佐留はうたまひづかきのかみ楽官頭である。儀式の度に歌を詠む。うたまひづかきのかみ楽官を辞めさせよう。

菟野の不機嫌な顔に、いそのかみのまろ石上麻呂は小さくなっている。物部麻呂はいつの頃から石上麻呂と名乗っている。物部を名乗っている限り、何時までも裏切り者のイメージがついて回る。

「佐留を罷めさせなさい。」

「は、はあ。」

麻呂の返事には戸惑いがある。

「何か不都合なことでもあるのですか。」

「は、はあ。ただ。この度の佐留の歌は、その、大変評判がよろしいようでごさいます。ええと、これを罷めさせるとなりますと、」

麻呂は冷たい汗を絞る。

「巷では私が高市を殺したと言っているそうですね。ここで佐留を罷めさせたら、やはりそうだと言われかねないというわけか。」

菟野に問われて麻呂は返答に窮した。単純な男である。困ると顔があらむ。

「誰がそのようなことを申し上げたのでしょうか。臣は聞いてはおりませぬが。」

嘘をつく和小鼻がひくひくと動く。幼い頃からの癖を菟野はよく知っている。菟野の乳母と麻呂の乳母は、共に河内の菟野の地に住みついた新羅人の末である。かつて壬申の乱の前に菟野は密かに敵方の麻呂に、最期まで大友から離れるなど命じた。菟野の命を忠実に守った麻呂は、今でも菟野の意のままに働く。

その麻呂に入れ知恵した者がいることなど、菟野は知らない。

「いかがでございましょう。佐留の歌を褒めて位を上げてやられましたは。皆、大王様の御心の広さに感涙して、大王様を疑う者もいなくなりました。その上でどこぞ田舎の国の守にでもして放り出せばよろしいかと存じますか。」

驚いた。この男のどこからこのような謀が生まれるようになったのか。

「見直しましたぞ、麻呂。そのようにしなさい。あ、もしかしたら高市を殺したのはそなたではないのか。」

大津のこともある。この男ならやるかもしれない。全て菟野のためと思つて
いる。

「とんでもございません。私はやっておりません。ただの噂でございます。きつと真のご病気でございましょう。」

むきになって否定するその言葉に嘘はない。では、誰か。誰が高市を殺したのか。それとも本当に病氣だったのか。菟野が殺したという噂は迷惑である。だが、高市が今死んでくれたのは確かに好都合であった。菟野はこの頃自分の衰えが気になっている。自分が元氣なうちに手を打っておかねば、輕の王位が危うい。焦りはあった。菟野の焦りを見透かしたように高市を殺した者がいるらしい。声も挙げずに菟野のために働く者の存在は、嬉しくもあり、不気味でもある。

「やはりあの男か。」

やるとしたらあの男しかない。菟野は丸顔の男の愛想の良い笑みを思い浮かべていた。

高市の死は余りにもタイミングが良すぎた。その死に疑いを抱く者がいたとしても無理はない。御名部の言う沈黙の効果である。

「皇子様は病氣なんかじゃなかった。矢に当たった傷がもとで亡くなられたのだそうだ。」

「まさか。だが、それが真なら大変なことだぞ。」

「獵師の流れ矢だろうか。」

「獵師は獵師でも太刀を佩いた獵師ではないのか。」

「川島皇子様の時と同じやつかも知れぬぞ。」

「川島様か。あれからもう五年になるかなあ。」

噂に尾鱈はつき物である。他人の不幸を心底悲しむものはいない。むしろ、無責任な噂ほど興味をそそられるものである。壬申の乱の英雄高市の死としては、腹痛より敵の矢に当たって死ぬ方がふさわしい。噂はどんどん独り歩きをしていく。

その頃、都の大路をブラブラ歩く男が一人。頬の傷が醜く引きつっている。

両腕を懐に入れて考え込んでいる風情。懐が重たげにふくらんでいる。男はそのまま川原に下りる。枯れ草の上に腰を下ろすと、小さな溜め息が漏れた。まだ日は高い。日の光をたっぷり吸った枯れ草が、ほっかりと男の尻を包み込む。しかし、そのぬくもりも、男の心には届かない。男の心の空には黒雲

が垂れ込めて、今にも降り出しそうである。

「イタチの小父さん、どうかしたの。」

顔見知りらしい。川原の掘っ立て小屋から出てきた少年が並んで腰を下ろした。

「遊ぼうよ。」

男は黙って水面を眺めている。長い時がたった。いつの間にか少年もいなくなった。影が長くなって、徐々に水面が光を失っていく。ようやく立ち上がると、男はスタスタと歩き出した。

山の麓に今にも潰れそうな一軒の小屋。男は入り口の筵を跳ね上げて中をのぞく。中央の炉の上で鍋がグラグラ煮えたぎっている。強烈な刺激臭が鼻を突く。炎と湯気と煙の向こうで、何かがうごめいている。白髪と長い顎鬚が炎に照らされて赤く浮かび上がっている。

「褒美じゃ。」

男は懐から反物を三つ取り出すと炉の横に放り投げた。

「ふん。」

老人は反物を一瞥してつばを吐くとまた鍋の中をかき混ぜ続けた。

時は移ろい、紅葉が舞うようになった。物悲しい季節である。わずかに残った紅葉が裸木にしがみついている。老いさらばえたわが身を見るようで、安麻呂は寂しい。カサカサと北風に吹き寄せられる枯葉の音を聞くと、暖かな人肌が恋しくなる。ひよどりの甲高い鳴き声にふと我に返ると、いつの間にか安麻呂の馬は坂を登って行く。坂の上の館にひっそりと住む女人。その邑名のおおらかな物言いは安麻呂のささくれだった心をゆったりと包んでくれる。

やがて乳母に手を引かれて挨拶に出た娘を抱き上げると、安麻呂は相好を崩した。

「おお、大きゅうなったの。良い子であったか。」

母に似て色白の娘は三歳になった。おしゃべりが上手になって可愛い盛りである。三人の息子の後、安麻呂には初めての娘である。孫のようなこの娘が、安麻呂には可愛くてならない。

「先日女たちが集まって『人麻呂』の歌を褒めておりましたの。でも、あなたは『人麻呂』はお嫌いでしたね。」

「いや、そうでもないぞ。高市皇子様の時の歌はなかなか良かった。」

「そうなのです。戦を見ていない私でも地響きと喚声が聞こえるような気がいたします。」

「うん。俺も昔を思い出して胸が高鳴ったぞ。近江朝、何するものぞ。先の大王のご遺志を継ぐのは我々だ。負けてたまるか。」

「あの歌には真の悲しみがこもっています。あの嘆きはあの方の本心から出たものでしょうね。」

「うん。あの歌は我々に勇気を与えてくれた。『人麻呂』め。ただのおべっか

使いだと思っていたが、なかなかどうして気骨のある奴かもしれぬ。」

秋の夜は長い。酒はどうしても湿りがちになる。

「高市皇子様はどうして亡くなられたのだろう。」

安麻呂にはどうも合点がいかない。

「俺はどうも大后のなされようが気に入らぬ。一体、あの壬申の乱は何だったのだ。出世するのは近江朝のやつらばかりで、あの時、手柄を立てた者は、死んでから位を貰うだけではないか。」

叔父の馬来田と吹負が死んで、もう十三年になる。安麻呂は鼻をすすった。

「高市皇子様はわしらの気持ちを良くわかって下さった。皇子様はわしらの先頭に立って浄御原朝を守ろうとなさったのだ。」

この頃安麻呂が激してくると涙もろくなるのは、年のせいだけでもなさそうである。